

「未曾有」の読み間違えから考える

丸川 知雄

麻生元首相の「みそゆう」

二〇〇八年、当時首相だった麻生太郎氏が「未曾有」を「みそゆう」と読み間違えたというのでマスコミでずいぶん叩かれた。それをみて大人たちは、表向きは「首相ともあるうものがあるんで無教養な」と呆れて見せたかも知れないが、内心では、かつて自分が漢字を読み間違えたことなどを思い出したりして秘かに赤面したのではないだろうか。実際、この事件のあと『読めそうで読めない間違いやすい漢字』という本がベストセラーになったそう。

だが、中国語を知る身からすると、この騒動のそもそもの原因は日本語における漢字の読み方が複雑すぎることにあり、「未曾有」を「みそゆう」で読んでしまうのもしかたがないように思える。中国語では「有」という字には「ヨウ」という読み方しかないのに、日本語では有無や未曾有の時は「う」、保有、有機、有償などの時は「ゆう」と読み分けなければならない。同じ「有為」でも「有為の青年」と書いてあれば「ゆうい」と読み、「有為転変」と書いてあれば「うい」と読まなければならない。おおよそ規則性がない。どう

やら大勢は「ゆう」で、仏典に出てくるような言葉は「う」という使い分けのようだが、どの場合も要するに「ある」という意味なので、読み分ける必要など本来ないように思える。

中国語ではほとんどの字は一つの読み方しかない。まれに二つの読み方がある字もある。例えば「角」という字は、「つの」だとか「かど」を表すときはジャオ (Jiao)、芝居の配役という意味の時はジュエ (Jue) と使い分けられている。あるいは、「給」という字は、「あげる」という意味で使うときはゲイ (gei)、供給という言葉で

使うときはジー (ji) になる。しかし、実際に中国人が話すのを聞いていると使い分けはけっこういい加減で、経済学者でも「供給」を本来の「ゴンジー」ではなく「ゴンゲイ」といつている人も数多くいる。それに対して、「先生、ここはゴンジーと読まなければいけないですよ」と訂正したりすることも多いようである。なにしろ中国の中高年のほとんどはお国なまりの強い中国語を話しているので、発音の面で人の揚げ足をとりましたらきりがいいからであらう。

「ゆ」 と 「う」

さて、もともと一つの音しかないはずの「有」という漢字に、日本語を表すために日本人が「あ(る)」という訓読みを付け加えたのはよいとして、なぜ漢語を表すときに「ゆう」と「う」という二つの読み方(音読み)があるのでしょうか。それは日本人が飛鳥時

代から室町時代に至るまできわめて長い時間をかけて中国語を日本語の中に取り入れてきたため、中国の様々な地方と時代の読み方が伝わってきたからである。「有」という字の「う」という読み方は呉音と呼ばれ、奈良時代以前に長江下流域の言葉が朝鮮半島経由あるいは直接に日本に伝わってきたものとされている。一方、「ゆう」という読み方は奈良時代末から平安時代にかけて遣唐使や留学生として唐に赴いた人々が伝えた長安の発音で、漢音と呼ばれる。

ただし、呉音が実際のどの程度正確に呉の地方の発音を写し取っているかは疑問だとされている(高島俊男『漢字と日本人』文春新書)。上海人に「有」という字を上海語でなんと読むのか聞いてみたら「ユー」だと言っていたから、少なくとも現代の呉では漢音に近い発音になっているようである。いずれにせよ、「有」という字には

本来一つの意味⇨音しかなかったものが、日本人が長い間に中国語を様々な地方の中国人、あるいは中国語を知っている朝鮮人などいろいろな先生に教わったために、各地の方言が混ざってしまったのである。「有」の字を未曾有のときは「う」、保有の時は「ゆう」と読まなければならないというのは、いわば日本語があるときは北海道出身の先生、あるときは大阪出身の先生に教わったがために、女性と別れるときは「したっけねー」、男性と別れるときは「ほな、さいなら」と挨拶しなればならない、と言っているようなものである。どうせなら最初から最後まで同じ先生に習っていれば、不必要に複雑な区別ができて後世の首相が恥をかきようなこともなかったであらう。

実際、日本でも奈良時代の末頃に、遣唐使が伝えた漢音に漢字の読み方を統一すべきだという勅令が出された(大島正一『漢字伝来』岩波新書)。し

かし、結局異音を排除するには至らず、「未曾有」のような仏教用語などに異音が残ってしまった。

さらに、人名に使う漢字に関しては、どのように読もうとまったく制限がないため、最近では、漢字の字面だけ見てもおよそどのように読むのかわからないような名前が増えていく（私の小学五年の娘のクラス名簿をもとに具体例を紹介したいところだが、やめておく）。こうして漢和辞典には出てこない漢字の読みが増えつつある。

ストライキとストライク

興味深いことに、外国語では同一の言葉が日本語に取り込まれるときに二つの読み方と意味に分化してしまう現象は、中国語と日本語の間だけでなく、英語と日本語の間にも生じている。例えば、労働組合が賃上げを要求して行うのはストライキだが、野球でバッターが空振りしたらストライク。歩く

り、実際、明治四三年に書かれた森鷗外の小説「普請中」ではホテルのディナーにサラドが出てくる。

ベトナムかヴィエトナムか

子音の後に補う母音についてはだいたい規則が固まったようだが、vをヴとするかブとするか、diをディとするかジとするかなど、いろいろこだわりを持つ人がいるため、外来語の表記法の規則が必ずしも統一される方向にあるとはいえない。例えば日本の外務省ではベトナムを「ヴィエトナム」、ヨルダンを「ジョルダン」と表記するのが正しいことになっていた⁽¹⁾。この規則は外務省のみならずその傘下の団体などにも及んでいたため、私も某団体に提出する報告書のなかで「ベトナム」という表記をすべて「ヴィエトナム」に改めさせられたことがある。同じ国を表現するのに、一般の雑誌などに寄稿する際には「ベトナム」、外務省や

ときに使う棒はステッキだが、ドラムを叩く棒や、アイスホッケーで使う棒はスティック。英語に関する若干の誤解から二つの読み方に分化してしまっただけもある。同じ「よい打ちこみ」があった場合であっても、ゴルフの場合には「ナイスショット」、サッカーやバスケットボールの場合は「ナイスシュート!」と叫ばなければならない。

これらの言葉が日本語に入ってきたのは明治時代以降であろうし、教える側の英米人の発音は、漢字の読みを日本人に教えた中国人たちほど極端に異なっていたわけではないだろう。二つの読み方が生じたのは英語の側ではなく、もっぱら日本側の事情によるものである。その事情とは何か。おそらく英語の音を日本語に移す際の規則が徐々にできあがってきたので、早い時期に取り入れられた英語の読みが、後から見ると正しくないと感じられたのであろう。右の例で言うとストライキ

その関連団体に提出する報告書では「ヴィエトナム」と、相手の顔を見て書き分けなければならないという何とも面倒なことになっていった。外務省は「原音に忠実に表現する」ためだと主張していたが、ベトナム語では語尾の子音はほとんど発音されないの、どうせなら「ヴィエトナム」にするぐらい徹底してほしいところである。

もともと外国語のなかでは一つの字や言葉であったものが、日本語に取り入れられる過程で複数の読み方や言葉に分化してしまっただけでなく、外国人のみならず、日本人自身も悩まされ、首相までが恥をかいている。不必要に複雑な部分については一度日本語の大掃除をした方がよいように思うが、奈良時代と違って民主主義の現代日本では勅令で漢字の読み方を統一するようなことはなかなかできないだろう。さらに、奈良時代末に勅令を出しても結局異音を追放できなかったように、自らの

とステッキが早い時期に作られた読み方で、後の日本人が子音で終わる英語には母音「ウ」を補うべきだと考えて、ストライクとスティックという言葉を使ったのであろう。

k、l、m、p、sで終わる英語には「ウ」を、dやtで終わる英語には「オ」を補うのが正しいと日本では思われているようだが、日本語と同じく子音で終わる英語に母音を補うポルトガル語では「イ」を補うことが多い。ブラジルを旅したとき、私が泊まったB&Bの主人に「Do you go アウチ トゥナイチ?」と聞かれたが、日本ならばこれが「Do you go アウト トゥナイト?」と発音される。日本人は後者でないと聞き取れないだろうが、英語のネイティブにとってはどちらもなままっている点では五十歩百歩であろう。なお、右の規則に反するのが「サラダ」である。Dでおわるのだから本当は「サラド」になるべきであ

言語習慣に強いこだわりを持っている集団がいると、言語の改革は失敗する。そこで逆に日本語の細かい読み分け・使い分けについてももう少しおろかにする、というのはどうだろう。「未曾有」を「みそうゆう」と読んで目くじらを立てない。サッカーの実況でアナウンサーが「素晴らしいショットでした」と言って、視聴者から

「サッカーなのだからシュートというべきだ」と抗議の電話が来ても無視する。そうやっていろいろな読み方・使い方が混在するようになると、自ずから人々はわかりやすい方へ流れ、不必要に複雑な読み分け・使い分けをしなくて済むようになる、ということにならないだろうか。

(1) なお二〇〇三年をもって外務省での奇妙な地名表記は廃止され、今では高校の地理で習うのと同じ地名が用いられている。

(まるかわ・ともお)

東京大学社会科学研究所教授